

「サステナブル・ファミリー」

作 .. 泰雅

○ 梗概

電器屋で働く生真面目で堅物な男・森崎義生（31）は、妻の薫と離婚危機にある。別居状態のため幼い娘、夢乃とも離れることになり、大学生の妹、美紅のアパートに居候していた。

ある夜、美紅が家に彼氏を招いたため、義生は仕方なくネットカフェで一夜を明かす。しかし、その場でなぜか男と一緒にいる薫と夢乃を目撃し、激しく動揺する。同じ頃、家にあった義生の私物を見られた美紅は、彼氏に浮気を疑われていた。

翌日、林崎という名前の男が電器屋に来店する。接客しているうちに、ネットカフェにいた男だと義生は気づく。林崎も、森崎という苗字に心当たりがあって、義生の素性に気づくのだった。

ファミレスに集まった一同。義生が問い詰めると、薫は、林崎はただの同級生で、離婚相談仲間だと説明する。やりとりを見ていた

林崎は、二人の間の愛情が冷めていないことを感じ、薫と距離を置くことを決める。

その夜、美紅の家に帰った義生は、美紅の彼氏と対面する。浮気ではなかったと無事に誤解は解け、美紅は彼氏と無事に仲直りする。

翌朝、すっかり気が抜けて呑気に休日を迎えている義生のもとへ、薫から離婚届の入った封筒が届く。

結婚生活を過ごした我が家を久しぶりに訪ねる義生。急な離婚届を片手に薫を問い詰める。薫は、林崎との関係が発展することはもう無いと思い、同時に義生との関係も終わるタイミングだと感じたと告げる。

数ヶ月後。義生の一人暮らし先に遊びに来ている薫と夢乃。お互い吹っ切れた雰囲気だ。ある夜、電器屋社長の石野と居酒屋で話す義生。まだ離婚届を出していないことを明かす。別居したまま、どうなるかわからない結婚生活を送っているのだ、と笑う義生だった。

○ 登場人物

森崎 義生 (31) 電器屋勤務

森崎 薫 (31) 義生の妻

森崎 夢乃 (7) 義生の娘

森崎 美紅 (19) 義生の妹

林崎 徹 (31) 薫の同級生

林崎 蓮 (7) 徹の息子

元岡 武司 (19) 美紅の恋人

石野 佐介 (60) 電器屋社長

男性客

女兒

大男

担任

管理人

女性店員

バイト

○薬局・駐車場（深夜）

雪が降っている。

エンジンがかかったままの車が一台。

その車内、一人後部座席にいる森崎夢

乃（7）、窓から外を見ていて。

夢乃「（雪に興味津々な様子で）……」

箱ティッシュを二つ下げた森崎義生

（31）が、車に近づいてくる。

夢乃、気づいて、真顔で漫画を読む。

義生「（窓から後部座席を覗いて）……？」

義生、運転席のドアを開け、覗いて。

義生「ママは？」

夢乃「（漫画読んだまま）ヨシオ、寒い」

義生「ああごめん（と、ドアを閉める）」

義生、助手席側に周り、ドアを開けて。

箱ティッシュを置こうとして、お菓子

のカスが散らばった座面に気づいて。

義生「……」

と、コートのポケットからポケットテ

ィッシュを出し、丁寧に座面を拭く。

箱ティッシュを助手席に置いて。

義生「ねえ、ママは？」

夢乃「（義生を睨んで）ヨシオ、寒い」

義生「ああごめんごめん」

と、運転席に乗り込み、ドアを閉める。

義生「ねえ、ママは？」

夢乃「知らない」

義生「あいつ、どこ行ったんだ」

夢乃「あいつじゃないよ。ママ」

義生「……ママ、どこ行ったんだ」

夢乃「たぶんトイレ」

義生「そう」

夢乃「ヨシオ、暑い」

義生「（どっちだよ、と不満げな顔で）……」

義生、温度を下げるボタンを一回押す。

義生「あんな夢乃、ヨシオじゃなくてパー」

勢い良く後部座席のドアが開き、乗り

込んでくる森崎薫（31）。

薫「（義生に）早いな」

義生「おいこら、一人でどこ行ってた」

薫「どこってトイレ」

義生「娘を置いたまんまでか？」

薫「うん。それが何か」

義生「危ないだろ」

薫「ちゃんと暖房付けたまんまで行きました

ー。(夢乃に)ママ偉いねえ」

夢乃「偉いねえ」

義生「そういう問題じゃない。第一、暖房効かせ過ぎだ」

と、温度を下げるボタンを連打する。

薫「(夢乃に)暑かった？ ごめんねえ」

義生、車を発進させる。

義生「なんで今日夢乃助手席じゃないんだ」

薫「え？」

義生「最近助手席座らせてんだろ。お菓子のカスが落ちてた」

薫「ポテチ好きなんだよ最近この子。ねー」

夢乃「ねー」

義生「ボロボロこぼれるじゃんか。キャンデイトかにしろよ」

薫「喉詰まったらどうするの」

義生「じゃあ飲むゼリーとか」

薫「どっちが喉に詰まりやすい？」

義生「卵ボーロ」

薫「喉乾くし」

義生「そもそもここで何も食べるな」

薫「関係ないでしょ、自分の車じゃないんだから。（夢乃に）いちいちうるさいね、この人」

夢乃「ヨシオ、うるさい」

義生「ヨシオじゃなくてパパだ」

夢乃「ごめんなさい」

義生「いい子だ。さすが僕の子」

薫「……」

○大通り（深夜）

車が走っている。

車内。漫画を抱えて寝ている夢乃。

スマホを触る薫、運転する義生。

義生「漫画読ましてるのか」

薫「え？」

義生「夢乃。漫画読んでるのか」

薫「そうだけど」

義生「大丈夫か？」

薫「大丈夫って何が」

義生「本を読んだ方がいいとは言ったけど、

漫画は反対だ」

薫「なんで」

義生「字の多い本を読まないと馬鹿になる」

薫「この漫画、字多いよ。主人公の弁護士鮫

島って言うんだけど。そいつがまあお喋り

でさ。電車乗ってても法事でお経唱えられ

てても関係ない。ずっと一人でベラベラと」

義生「薫も読んでるのか」

薫「私？ 読んでますよ面白いですよ」

義生「とにかく反対だ。漫画は良くない」

薫「なんで」

義生「良くないからだ」

薫「ただ良くない良くないって。馬鹿みたい。

ずっと前からこの子好きで読んでるのに」

義生「ずっと前について」

薫「ヨシオさんが家出る前から」

義生「小学生といえば、図書館の伝記だろ？」

アンネ・フランクとか、キュリー夫人とか

二宮金次郎とか。野口英世もいい」

薫「何読まそうが、ヨシオさんに関係ないで

しょ。あなたの価値観押し付けないで」

義生「教育方針は夫婦二人で決めていくって」

薫「あーそういや、ティッシュ急ぎじゃなか

ったなー！ トイレットペーパー家に大量

にあるから。積み上げてお城作れるぐらい。

わざわざごめんね、こんな夜中に、うん」

○アパート・前（深夜）

停まっている車。

運転席に薫、助手席に夢乃。

夢乃はポテトチップスを食べている。

車の前に立っている義生。

薫、窓から顔を出して。

薫「ねえちよっと。邪魔。轢かれるよ」

義生「ああごめん（と、少しずれる）」

薫「遅くまでありがとね」

義生「（いえいえ、と頭を下げる）」

薫「（夢乃に）夢乃、バイバイって」

夢乃「バイバイ」

薫「（夢乃に）パパ、バイバイって」

夢乃「パパ、バイバイ」

義生「（微笑んで）夢乃、またね」

薫「じゃあ、また来月お願いします。例の書

類の方は後ほど改めて郵送しますんで」

薫、窓を閉め、車を発進。

車が去っていく。

義生、背を向けて歩き出す。

○同・美紅家（深夜）

一人暮らしサイズの居室。

キッチンでヤカンがピーピー鳴り出す。

森崎美紅（19）、トイレから出て。

美紅「はいはい、今止めますからねー」

と、火を消して、シンクで手を洗う。

玄関が開き、元氣なく入ってくる義生。

義生「ただいまー……」

美紅「おかえり。遅かったね、水族館？」

義生「水族館行ってトイザラス行ってお好み焼き食べて、トイザラス行って本屋行って

トイザラス行って薬局行った」

美紅「めっちゃ行くじゃんトイザラス」

義生「夢乃がおもちや見たいって言うから」

美紅「買ってあげたの？」

義生「いや、いいのないつてさ」

美紅「あーお兄ちゃん、ダメダメ。こういう

時期はなんでもいいから買わないと。点数

稼げないよ」

義生「こういう時期。点数」

美紅「てか薫ちゃんに言った？」

義生「何が」

美紅「一つしかないでしょ」

義生「……（首を横に振る）」

美紅「あー、ダメダメ」

義生、覚束ない足取りでシンクへ。

美紅「ラーメン食べる？ 傷心のお供に」

○同・外観（深夜）

美紅家だけ明かりが点いている。

○同・美紅家（深夜）

カップ麺を食べる義生と美紅。

美紅、英単語帳を見ながら食べている。

義生「（美紅の手元を気にして）……」

美紅「トイック七百点以上取れたらさ、授

業取らずに三単位もくれるらしいからさ」

義生「お兄ちゃんときはそんなのなかった」

美紅「ふーん。真面目に授業受けてたんだ」

義生「そりゃあもちろん」

美紅「それで大学楽しかった？」

義生「それなりに」

美紅「ふーん（と首を捻って）」

義生「楽しいって、ホント」

美紅「ふーん。じゃあ今は？ 今楽しい？」

義生「話変わった」

美紅「変えてない。何ヶ月？　ここに来て」

義生「一…二…いや三か」

美紅「このまま別れていいの？　薫ちゃんほ
どお兄ちゃんのことわかってくれる人いな
いと思うけど」

義生、キッチンへ行き冷蔵庫を開ける。

義生「あれ牛乳は？」

美紅「無い。いるなら自分で買ってきて」

義生「いつも飲んでたじゃん」

美紅「飲んだら飲んだだけ太るってミヨコが
言ってたんだよね」

義生「誰だよそいつ」

美紅「倫理学の講義同じ子」

義生「（ぼそっと）明日買ってくるか」

義生、冷蔵庫を閉めて。

○タイトル「サステナブル・ファミリー」

○石野家電・外観（日替わり）

町の小さな電器屋。

『石野家電』の廃れた看板。

○同・中

商品が多く積まれ、狭苦しい店内。

頭に鉢巻きをした石野佐介（60）、

レジの中で段ボール箱を解体中。

胸元の名札に『石野』とある。

石野「森崎くん……森崎くん？」

義生の声「社長僕ここです」

商品棚の陰から現れる義生。

胸元の名札に『森崎』。

石野「先月の給与明細、取った？」

義生「え、どこですか」

石野「どこだっけ」

義生「え」

石野「あ、あった……これだ」

と、レジ台の書類の山から明細を取る。

義生「そんなとこ置かないでくださいよ。取

られたらどうするんですか」

石野「お客さんいないんだから大丈夫。はい、

俺からのクリスマスプレゼント（と、明細を差し出す）」

義生、来て、受け取って。

義生「もう一月ですけど。どっちかと言うとお年玉……いやでもこれただの紙だしな」

石野「細かいことはどうでもいいの。まだ住んでんのかい？ 妹ちゃんの家」

義生「……」

石野「給料上げられたらいいんだけどな。お客さんいないから。ごめんよ」

義生「いやそんな」

男性客の声「すみません。すみませーん」

と、店頭で手を挙げている男性客の姿。

石野「あ、はい、すぐ行きまーす」

義生「（ぼそっと）いるじゃんお客さん」

○同・前（夕方）

店のシャッターを下ろす義生。

近くで見守る石野。

石野「飯行くか」

義生「あー今日は、いいです」

石野「そう」

義生「行きたいところあるんで」

○玩具屋（夕方）

玩具屋の女の子用オモチャ売り場。

真剣な顔で選んでいる義生。

通り過ぎる女兒、怪訝な目を向ける。

○アパート・前（夜）

玩具屋の袋を下げて、歩いてくる義生。

義生「（鼻歌）ラーラーラーラー」

スマホのバイブが鳴る。

義生「（立ち止まって、出て）もしもし」

美紅の声「お兄ちゃんごめん、今どこ？」

義生「もう家着くよ。下にいる」

美紅の声「買い物は？」

義生「まだだけど。荷物あるから置いてから

行こうと思って。食パンと卵とティッシュ

と人参、トマトと玉ねぎ、あ、あと牛乳か」

美紅の声「ごめん、今日家無理だわ。どっか

泊まってくれませんか？」

義生「え、なんで」

美紅の声「なんでも」

義生「困るんだけど」

美紅の声「いや私も困る。てか私の家だし」

義生「男か」

美紅の声「ごめんね。買い物も行かなくてい

いから」

義生「……」

○ネットカフェ・外観（夜）

○同・個室→通路（夜）

フラットタイプの広めの個室。

テーブルに玩具屋の袋。

仰向けに寝転んでいる義生。

義生、体勢を整え、目を瞑って、……。

男の大きなイビキが聞こえてくる。

義生「……（軽く咳払いで威嚇）」

止まるイビキ。

義生「（満足げに頷き、目を瞑って）……」

また大きなイビキ。

義生「……（やや大きめの咳払い）」

止まるイビキ。

義生「（大丈夫か、と目を瞑って）……」

また大きなイビキ。

立ち上がり、隣を覗こうとする義生。

夢乃の声「うわすごい、漫画がいっぱい！」

義生「！」

義生、振り返ると、本棚の前に夢乃。

夢乃「これ、どれでも読んでもいいの？」

本棚の陰から現れる林崎徹（31）。

林崎「そうだよ、読み放題なんだ」

義生「！」

夢乃「わーい、わーい！」

林崎「あ、夢乃ちゃん。一つだけいいかな。

ここは騒いじゃいけない場所だからね」

夢乃「ごめんなさい」

林崎「色々な事情を抱えた寂しい人たちの住
処でもあるんだから」

夢乃「寂しい人？」

林崎「好きなの選んで持ってきたさい。向こ
うで待ってるからね」

と、本棚の向こうに歩いていく。

義生、個室を出て、少し迷ってから、
本を選ぶ夢乃にゆっくり近づいていく。

薫の声「夢乃。決まった？」

と、薫が本棚の陰から現れる。

義生「！」

と、クルリと背を向ける。

夢乃「待って、今選んでる」

薫「ママトイレ行ってくるから。先に林崎く
んのところ行っといで」

と、歩いていく。

義生、数秒迷い、個室に戻る。

○アパート・美紅家（夜）

床をコロコロで掃除する美紅。

聞こえるシャワーの音。

美紅、手鏡で顔の調子をよく確認。

テーブルの美紅のスマホが鳴って。

美紅「（出て）はい。取り込み中なんだけど」

○ネットカフェ・個室（夜）

義生、スマホを耳に当てていて。

義生「ネカフェデートは流行りか」

美紅の声「は？」

義生「子連れネカフェデートは流行りか？」

美紅の声「は？ 意味わかんない」

義生「な、意味わかんないよな」

美紅の声「じゃなくて、お兄ちゃんの言うてること」

義生「今ネットカフェにいるんだけど」

美紅の声「寝床見つけたんだ」

義生「それはいいんだけどさ。薫が、薫が夢

乃を連れて男とネカフェデートしてる」

○アパート・美紅家（夜）

電話する美紅。

美紅「そういうこともあるんじゃない、よく
わかんないけど」

義生の声「だよな、やっぱりよく——」

シャワーの音が止まる。

男（元岡）の咳払いが聞こえる。

美紅「ごめん、切るわ」

○ネットカフェ・個室（夜）

スマホを耳に強く押し当てている義生。

義生「え、あ、え、美紅？ 美紅？」

大男の声「おい！」

隣の個室から覗いている髭面の大男。

大男「うるせえんだけど」

義生「あ、すいません」

大男、顔を引っ込める。

義生、スマホの画面を、ぼーっと見て。

スマホをテーブルに滑らして置き、ふ

てくされたように枕に顔を埋める義生。

○アパート・外観（夜）

元岡の声「え、マジでどういうこと？」

○同・美紅家（夜）

テーブルの上に、男物（義生の物）の
歯ブラシや洗顔料など多数。

呆れた顔で見ている元岡武司（19）。

元岡「あーびっくりだわー。他に男がいたの
かー」

その隣、必死の形相で首を振る美紅。

美紅「違う違うんだって。これはお兄ちゃん
ので」

元岡「いやだからお兄ちゃん？ そんなの信
じられる？ だって三十過ぎてんだろ美紅
の兄貴。住んでるわけないよね一緒に」

美紅「住んでるんだって……」

元岡「証拠は？ 証拠あんの？」

美紅「え……」

元岡「あるわけないかー。てかさつきも男と
電話してたもんな、俺が風呂入ってるとき。

聞こえてたよなんか。びっくりだわ。普通
ちよつとは隠そうとするよな」

美紅「だから――」

元岡「今までありがとうございます！」

と、さつさと家を出ていく。

美紅、泣き顔になり、頭を掻きむしる。

○石野家電・中（日替わり）

レジの中で箱を解体している義生。

スーツ姿の石野、近づいてきて。

石野「じゃ、商談行ってくるね。よろしく」

義生「誰か来ます？」

石野「あー来ないでしょ。来ない来ない……

あ、待って、なんか約束あったかも」

義生「え、誰ですか」

石野「あ思い出した、林崎さんこの息子さん」

義生「誰ですかそれ」

石野「高校時代、野球部で世話になった先輩
の、息子さん。今度この町に越してくるん

だって。家電一式ご希望だそう。確か森崎くんと同世代じゃなかったかな」

義生「へえ」

石野「まあ適当にやっというて。じゃ、行ってきまーす」

行きかける石野。義生、その背中に、

義生「社長、鉢巻きいらないますかー」

石野「スーツに鉢巻きはないでしょ、ねえ？」

○ファミレス・中

食事中的薫と夢乃、向かいに林崎。

林崎「（夢乃に）美味しい？」

夢乃「うん！」

林崎「美味しそうに食べる女の子はモテるよね」

薫「だよね」

林崎「僕少食だから、余計にそう思う」

薫「少食だっけ？」

林崎「そうだよ。焼肉行っても、クツパ食べる前にギブアップするタイプ」

薫「焼肉でクッパ食べようと思うタイプなん

だね」

林崎「思うね。中田さ……森崎さんは？」

薫「肉と一緒に、大ライス食べる派かな」

林崎「僕と全然違う」

トイレから走ってくる林崎蓮（7）。

林崎「おお、おかえり」

蓮、林崎の隣に座る。

薫「林崎くん。どうするの」

林崎「はい？」

薫「例の件」

蓮「離婚の話だ」

夢乃「離婚の話だね」

薫「（咳払いして）……どうするんですか」

林崎「もう決まったよ。妻とは離婚したんだ。

東京を出て、こっちに帰ってくるよ。近く

に父もいるし」

薫「（驚きつつ）へえ……へえー……！」

林崎「もう賃貸も申し込んだ。（蓮の頭を触って）こいつの転校手続きも済ませた。今

日は家電を買いに行く予定なんだ」

薫「（呆氣に取られ）へえ、早い……」

林崎「ところで、森崎さんはどうするの？」

○公園

砂場で遊んでいる夢乃と蓮。

近くで見守る薫と、立っている林崎。

薫「じゃあ私見とくんで」

林崎「じゃあ、お言葉に甘えて。（蓮に）蓮。

森崎さんの言うことしつかり聞くんだよ」

と、去っていく。

○石野家電・中

義生の頭には鉢巻き。

義生、箱を潰しては壁に立てかける。

× × ×

義生、レジ台の書類を素早く仕分け。

× × ×

義生、レジ台を丁寧に拭き掃除。

○同・前

看板をチラリと見て、入っていく林崎。

○同・中

掃除している義生。

そこへやってくる林崎。

林崎「あの一、すみません」

義生「え、あ、はい」

林崎「林崎ですけれど」

義生「あ、どうも」

林崎「(名札を見て)石野さん……」

義生「あーすいません、石野いなくて今。代

わりに僕がお伺いします」

と、林崎の顔を見て。

義生「……あれ？ どこかで会ったことあり

ましたっけ。いやないか」

林崎「……ないと思いますけど？」

義生「ですよ。じゃ、ご案内しますんで」

○公園

砂場で遊んでいる夢乃と蓮。

蓮「（ふと周囲を見回し）あれ？ 夢乃ちゃん
のママは？」

夢乃「知らない」

公園、他に誰もいない。

○石野家電・中

バインダー片手に案内している義生。

林崎、冷蔵庫を選んでいて。

林崎「小さい子どもと二人なんでそんなに大
きくなくていいと思うんですけど」

義生「三百リッターはあった方がいいですね」

林崎「そうなんですか」

義生「子どもはすぐ成長しますし、冷蔵庫は
大きければ大きいほどいいんです」

と、バインダーに目をやって。

林崎の氏名や電話番号が書き込まれて
いるアンケート用紙。

『氏名…林崎徹』の文字。

義生「（ぼそっと）林崎……」

× × ×

回想。ネットカフェ。

夢乃に話しかけている林崎の顔。

薫の声「先に林崎くんのところ行っといで」

× × ×

義生「……！」

林崎「これなんかどうです？ 国内産？」

義生「……あ、です、そうです」

と、ポーツとしている。

林崎「（義生を見て、名札を見て）……森崎

さん？ 大丈夫ですか？」

義生「あー大丈夫ですはい、心配なさらず。

いいのありました？」

林崎「あ、あつたんですけど。それより、森

崎さんというんですね」

義生「あ、はい」

林崎「似てますね、名前。林崎と森崎」

義生「あー……」

林崎「林崎って、いそうであまりいないんです。だから、森崎さんに会えて嬉しいです」

義生「はあ。まあ森崎と林崎は別物ですけど」
林崎「熱血ぽいですし。好きですそういうの」
義生「熱血？」

林崎「鉢巻き」

義生「あー鉢巻き……（急いで鉢巻きを外して）これは何かの間違いです」

林崎「いいコンビです、林崎と森崎」

義生「あ、ええ、はい、森崎と林崎」

林崎「……」

義生「寂しい人……」

林崎「え？」

義生「僕は寂しい人ですか」

林崎「は？ え、ていうか」

義生「……」

林崎「森崎さんって、あの森崎さん？」

○公園

薫、トイレから出てくる。

スマホのバイブが鳴って。

薫、取り出し、画面を見る。

○ファミレス・中（夜）

ボックス席、並ぶ林崎、蓮。

向かいに奥から薫、夢乃、義生。

義生、大口でナポリタンを頬張る。

薫「（義生に）ねえ、なんで怒ってんの？」

義生「怒ってません」

薫「怒ってるでしょ」

義生「そう見えるならごめんなさい。でも怒ってないです」

薫「知らない」

義生「今回の件、知らなかったのは僕が悪い
んでしょうか」

薫「言ってなかった私が悪いってこと？」

義生「デートでネカフェ行くかね」

薫「デートじゃないです、たまたま会ったん
だよ」

義生「あんなとこでたまたま？ そんな都合
のいいことがあるだろうか、いやない」

薫「あるの。夢乃が行ってみたいって言うか

ら連れてつたら、たまたま林崎くんも蓮くんと来てたの」

ニコニコしている蓮。

義生「変な趣味を教えるな」

薫「漫画がそんなに悪ですか」

義生「人が見てるテレビのチャンネル黙って変える妹よりは悪だ」

薫「は？ 何それ」

夢乃「何それ」

義生「歩道狭いのになわざわざ道幅いっぱいに広がって歩く中学生よりも悪だ」

薫「は？ 意味わかんない」

夢乃「意味わかんない」

義生「デートでデイズニー行きたいって自分が言ったくせに、いざ行ってみたらスペースファンタジーもスプラッシュマウンテンも乗ることなくずっとお土産屋見てるような人と同じぐらい——」

薫「（夢乃に）ねー、この人うるさいよねー」

夢乃「ヨシオ、うるさい」

義生「……」

林崎「（プツと吹き出して）ヨシオ……」

義生「なんでしよう？」

林崎「父親を名前で呼ばせるのはどうかと」

義生「それは僕も思います。（薫に）金輪際

やめさせてください」

薫「（夢乃に）やめさせてくださいだって。

自分で言えばいいのに」

夢乃「自分で言えばいいのに」

義生「（夢乃に）夢乃、やめ——」

夢乃「パパごめんなさい」

義生「うん、いいんだ、それで」

蓮「（林崎に）パパ、トイレ」

林崎「お、一人で行けるか？」

蓮、頷き、歩いていく。

薫「それで……なんの話だっけ？」

義生「あなたとこちらの林崎さんはどうい

関係ですか」

薫「同級生です」

義生「同級生」

薫「高校の。コンビニでヨシオと出会うずうつと前の話だよ」

林崎「コンビニ？」

薫「大学時代バイト先で出会ったの、この人と」

林崎「なるほど」

薫「林崎くんとは、当時はそんなに親しいわけじゃなかったんだけど」

義生「当時は、ということは今は、親しいんでしょうか。どれほど？ え、どれほど？」

薫「ちよつと、黙って聞いて。林崎くん、東

京の大学行ったから」

義生「東京の大学とは東京大学でしょうか」

薫「何それ今関係ないでしょ」

林崎「（笑いながら）違います」

義生「アそうですか」

林崎「はい」

薫「去年、同窓会で久しぶりに会って。で、

連絡先交換して」

義生「連絡先交換？」

薫「林崎くんずっと東京だったんだけど、こ
つちに帰ってくるつもりって言うから。夢
乃と同じ年の子どももいるって言うし、一
回会ってみたら面白いかなって」

義生「面白い」

薫「同窓会から、まだ会うの、三回目？ 四

回目？ ぐらい？」

林崎「たぶんそうだね」

義生「（林崎をじっと睨んでいる）」

林崎「（義生に気づいて）なんでしょう」

義生「（薫に）デートじゃんか」

薫「（夢乃に）ね、あそこで遊んでらっしゃ
い」

と、指さしたのはキッズスペース。

薫「蓮くんも、トイレから出てきたら、連れ
てってあげて」

夢乃「はい（と、義生を見る）」

義生、一旦出て、夢乃行き、義生座る。

義生「で……」

薫「ヨシオさんに関係ありますか？」

義生「は？」

薫「私が何をしようが、あなたにはもう関係ないですよね」

義生「ないですよねとは」

薫「私が林崎さんと会い始めたのは、あなたと別れてからです。いちいち首突っ込まないでもらえますか」

義生「まだ別れてません」

薫「私は別れてます」

義生「成立してません」

薫「書類もう送るんで。あ、なんなら今書きましようかここで」

林崎「書類？」

薫「離婚届」

林崎「ああ」

義生「持ってないでしょ」

薫「持ってないけど、（林崎に）ネットからダウンロードできるんですよ？」

義生「（林崎に）そうなんですか？」

林崎「そうみたいです」

義生「なんでそんなこと知ってるんですか」

林崎「最近ダウンロードしたんで」

義生「なんでダウンロードしたんですか」

林崎「最近離婚しましたので」

義生「……ああもうその段階か。お二人、籍

入れるのはいつですか、あ、日本は重婚N

Gですが、そのところ理解してますか。

女性は離婚後——」

薫「ね、ねねね、ヨシオ、違うよ？ 何勘違

いしてんの。私と林崎くんの間には何もな

いんだって。私の目を見て。信じて」

と、じつと義生を見据える。

義生、見返して。

義生「何もわからない」

薫「私と林崎くんは……なんていうか、離婚

相談仲間？」

義生「なんでこの人に」

薫「だって、ねえ……苗字も似てるし。前は

中田だったけど私、今は森崎で、ね。彼、

林崎で」

林崎「妙に親近感湧くというか」

義生「え、もしかしてあれですか。薫も苗字が似てるだけでワーワー言いたくなるタイプの人ですか、そんなしょうもないことでいちいち盛り上がる人ですか」

薫「は？ とにかく、そういうんじゃないんです、私たち」

林崎「はい、そういうんじゃないです」

義生「繰り返すのやめてもらっていいですか」

林崎、少し考えるそぶりをしてから。

林崎「まだ好きなんですネ、薫さんのこと」

義生「は？ 好きですよそりゃ」

林崎「……」

薫「……」

義生「は！？」

キッズスペース、遊んでいる夢乃と蓮。

○石野家電・前（夜）

石野、シャッターを下ろす。

○通り（夜）

手を繋いで楽しげに歩く夢乃と蓮。
その少し後ろを歩く薫、林崎。

薫「（夢乃、蓮を見て）仲良いなあ二人」

林崎「ですねー」

薫「この景色、いいと思わない？」

林崎「ですねー」

薫「……敬語？」

林崎「仲良いって、いいですね」

薫「……あのさ」

林崎「はい？」

薫「これから、どうすんの」

林崎「これから、と言いますと？」

薫「……」

林崎「……」

薫「ううん、なんでもないなんでもない」

薫だけ早足で先へ進んで。

薫「蓮くん！ 夢乃！」

と、夢乃と蓮を追いかけていく。

林崎「（ハア……と息を吐いて脱力）」

○アパート・前（夜）

歩いてくる義生。

牛乳が入ったコンビニ袋を下げている。

脇道の木がガサガサと鳴って。

義生「？」

義生、……と近づくと。

元岡、木の後ろから出てくる。

元岡「……兄貴さん？」

義生「は？」

○同・美紅家（夜）

隅で三角座りして俯いている美紅。

近くに義生、元岡。

義生「いや、君もね。美紅の話聞かずに一方的に決めつけたのは良くなかったと思うよ」

元岡「いやだって、まさかホントに兄貴と住んでるなんて……」

義生「まさかホントに、と思うことがこれからの人生ではいっぱいあるんだから。これ

も一つの社会勉強だと思って」

元岡「（美紅に）ホントごめん。俺が勘違いしてた。許してほしい」

義生「許すの？ 許さないの？」

元岡「（義生をギッと睨む）」

義生「何睨んでんの」

元岡「いや別に」

義生「僕のせいでアチアチホカホカエチエチカップルに隙間風吹きちゃったことは、申し訳ないと思ってる」

元岡「ホントっすよ」

美紅「ホントだよ……（と顔を上げて微笑）」

義生「あ、牛乳買ってきたから。ね？」

と、立ち上がって冷蔵庫を開けて。

元岡「なんでいきなり牛乳？」

美紅「さあ。（囁く）牛乳への信頼感半端ないからお兄ちゃん」

牛乳を持って戻ってくる義生。

義生「ほら……（元岡に）君も飲む？」

○同・前（夜）

去っていく宅配ピザ屋のバイク。

○同・美紅家（夜）

テーブルに牛乳、ピザ。

飲み食いしている義生、美紅、元岡。

義生は風呂上がりの格好。

元岡「で、デイズニー、遅刻したと思ったら、こいつ、俺のためにプレゼント買ってきてくれてたんすよ」

美紅「（笑って）もう、やめてよ」

元岡「ヴィトンのボールペンすよ。センスヤバいつすよね。テンション上がってそのあと、スペファン五回は乗りました」

義生「五回も乗れるほど空いてる日あるかな」

元岡「あつたんすよ。こいつも、ノリノリで」

義生「こいつは良くないなあ」

元岡「え？」

義生「こいつじゃなくて、美紅。立派な名前があるんだから」

元岡「あ、すいません。あ、元岡武司です」

義生「え？」

元岡「いや、さっき、俺のこと君って呼んでたんで。名前言ってなかったすよね」

義生「……あ、うん、ああ。元岡くんね、うん、元岡くん」

美紅、ニヤけて見ている。

美紅「なんか二人、気合いそう」

元岡「どうかかな」

義生「どうだろう」

元岡「てか、いつまでいる気なんすか」

義生「え？」

元岡「兄貴さん、いや、いつまでいる気なのかなーと思つて。ねえ、いつまで」

義生「何回も言わなくていいよ」

元岡「離婚するんすか」

義生「（美紅に）え、どこまで話したの」

元岡「奥さんに愛想尽かされて家追い出されたんすよね」

義生「んー、まあ、正確には違うけど、もし

二十字でまとめなさいって試験で出たら、
バツにはできないかも」

美紅「（元岡に囁く）花丸だよ」

元岡「なんで離婚するんすか？ もつたいない
と思いますけどね。相手、どんな人か知
らないけど。兄……お兄さんにはあんまり
いないと思います、そんな人」

義生「君にお兄さんと言われる筋合いはない」

元岡「元岡です」

義生「元岡くんにお兄さんと言われる筋合い
は……あんまりいないってどういう意味」

元岡「だって大変でしょ、お兄さん」

美紅「すごく大変。私もそろそろ限界」

元岡「うんうん」

義生「元岡くんに僕の何がわかるのさ」

元岡「わかります、なんとなく」

義生「……」

元岡「でも、もつたいないから別れないって
のも、それはそれで違うんすよね」

○アパート近くの通り（夜）

真剣な表情で歩いている薫。

手に、A4サイズの封筒を持っている。

薫「（立ち止まって、見上げて）……」

視線の先、美紅のアパートがある。

薫、また歩き出す。

○同・外観（日替わり）

スマホのアラームが鳴っている。

○同・美紅家

手鏡を広げ化粧をしている美紅。

美紅「お兄ちゃん、鳴ってるよ。起きて」

隅で毛布にくるまって寝ている義生。

義生「んん（と、唸る）」

美紅「遅刻！」

義生「！（と、飛び起きる）」

義生、アラームを止めて画面を見て。

義生「あー良かった、今日休みだ」

美紅「そうなの」

義生「デートか」

美紅「うん。お兄ちゃんありがとね。タケちゃんんと仲直りしたよ」

義生「……昨日のこと、あんまり覚えてない」

美紅「うん、覚えてなくていいんじゃない？

お兄ちゃんみっともなかったし。十歳以上

下の子と言い争ってたし」

義生「そうだっけ」

美紅、化粧を終えて、トイレへ。

義生「お兄ちゃん、出ていかないとな……」

× × ×

義生、カップ麺を食べている。

玄関で靴を履く、お洒落した美紅。

美紅「行ってくるね」

義生「なんか張り切ってないか」

美紅「そう？（郵便受けを見て）……あ、

待って、なんか来てる」

義生「ん？」

美紅、大きな封筒を取り、見る。

『森崎義生様』の文字。

美紅「お兄ちゃん宛だ」

義生「ん？」

○小学校・教室

教壇で担任に紹介されている蓮。

担任「冬休みが明けたばかりですが、転校生がやってきてくれました」

蓮、頭を下げる。

一同拍手。

夢乃、窓際の席から、笑顔で見ている。

○映画館・前

柱の近くで待っている元岡。

そこへ、手を振りながら来る美紅。

元岡と美紅、笑い合って……。

○走る電車内

封筒入りの手提げを下げている義生。

○マンション・前

早足で入っていく義生。

○同・エントランス

インターホンを鳴らしている義生。

義生「……」

返事はない。

掃き掃除している管理人、気づいて。

管理人「森崎さん？」

義生「……あ、どうも」

管理人「久しぶりだねえ。最近見てなかったからさ。仕事の時間変えたの？」

義生「いや、まあ」

管理人「それにしても最近寒いよねえ」

義生「あの。薫見てないですか」

管理人「薫？ ああ奥さんか。さあ……仕事じゃない？」

義生「仕事……（と呟き、引き返していく）」

管理人「（その背中に）え、なんで知らないの？ ねえ」

○スーパーマーケット・前

義生、早足で歩いてくる。

○同・中

混み合う店内。ごった返している。

義生、気圧されつつもレジに近づく。

中年の女性店員がレジ対応をしている。

女性店員「百八円が一点、二百五十円が一点、
九十八円が一点」

義生「あの一、あの……」

女性店員「二百三十円が一点。（義生に）お

客さん。ちゃんと並んでもらわないと」

義生「いやあの、森崎さん、います？」

女性店員「森崎さん？」

義生「森崎薫……の夫です」

女性店員「あ薫ちゃんの旦那さん？ ……え、

どういうこと？ とつくに本社に異動にな

ったよ、薫ちゃん」

義生「！」

と、引き返していく。

女性店員「ねえ、ねえ。え、ホントに旦那さん？」

○スーパーマーケット本社・前

ビルの前、待っている義生。
チラチラと腕時計を気にする。

× × ×

夕方。次々出てくる社員たち。

薫を探している義生。

だが、薫の姿はない。

× × ×

夜。凍えている義生。

スマホを取り出し電話をかけて。

義生「もしもし薫？」

薫の声「何ー？」

義生「今どこにいるの」

薫の声「どこって、家」

○マンション・森崎家・前（夜）

『森崎』の表札。

○同・同・寝室（夜）

ベッドで毛布にくるまる薫。

近くに立っている義生。

薫「どうやって入ったの」

義生「あー、鍵、思い出して。下のポストの
中に入ってたなって」

薫「勝手に取らないでよ」

義生「物騒だからやめた方がいい」

薫「関係ないでしょ、あなたの家じゃないん
だから」

義生「……」

薫「でも私もそのうち引っ越すかも。ここ家
賃高いし。え、なんの用？」

義生「夢乃は？」

薫「林崎くんちで遊んでる。ヨシオんとこで
買ったんでしょ家電。納品明日って言って
たから、家すっからかんの今のうちに走り
回りたいたって、だから」

義生「あの人仕事何してるんだ、林崎さん」

薫「知らない、興味ない」

義生「……ずっと本社の前で待ってたんだ、
昼過ぎから」

薫「馬鹿だねえ。早く電話くれれば良かった
のに」

義生「……」

薫「体調悪くて早退したの」

義生「入れ違いになってたのか」

薫「そうみたいだね」

義生「大丈夫なの、体調」

薫「聞くの遅い。そういうとこだよね」

義生、手提げから封筒を出して。

義生「ねえ、これ（と中身を出して）」

離婚届。薫の名前や住所は記載済み。

薫「あ？」

薫、少し体を起こして、見て。

薫「あ、見た？ 私のとこ書いといたから、
あなた書いたら出せるよもう」

義生「いつ出した」

薫「え？」

義生「これ、いつ出したんだよ。まだ送ってないって言ってたはず」

薫「昨日の夜、入れに行ったの直接」

義生「直接？」

薫「どうしても、今日だ、って思ってた。美紅ちゃんちのポストに」

義生「なんで」

薫「なんでって、タイミングでしょ」

義生「……なんの」

薫「言わなきゃダメ？」

義生「言ってほしい」

薫「林崎くんとは私、やっぱりダメだわ。昨日、わかった」

義生「……」

薫「始まる前に、終わったわ」

義生「だったらどうして」

薫「ヨシオはもつとないんだよ」

義生「……」

薫「私とヨシオさんは、ちゃんと始まって、ちゃんと終わるんだよ。夢乃の父親ってい

うのは一生変わらないからさ、これまで通り、頼むよ」

義生「……」

薫「あー体調悪いから今、親権とかお金がーとかの話はなしね。また後ほど改めて」

と、目を閉じる。

薫「寝るわ。冷蔵庫に一昨日のカレー余ってるから食べていいよ、最後に。まずいけど」

義生「夢乃は……夢乃は、それでいいって言うてるのか」

薫「言ってる。私よりずっと大人だからさ、あの子。ママの好きなようにしていいよって。人生二周目だわ絶対」

義生「これ、持ってきたんだけど」

と、手提げから玩具屋の袋を出す。

袋から覗いているクマのぬいぐるみ。

薫「（目を開けて）漫画？ なわけないよね」

○公園（日替わり）

木々に桜の蕾が付いている。

○石野家電・中

整理整頓されたレジの中、郵便物を仕分けしている義生。

ふと手を止めて、レジ台に置かれた写真立てを何やらぼーっと眺めて。

レジに向かってくる石野。

石野「森崎くん。明日二件予約入ったから珍しく。新婚さんと女子大生の一人暮らし。

よろしくね」

義生「(ぼーっとしたまま)……」

石野「森崎くん？」

と、不思議がって写真立てを見て。
写真立てには家族写真。水族館の水槽をバックに笑顔の義生、夢乃、薫。

石野「ねえ、森崎くん？」

義生「あつすいません。意識飛んでました」

石野「(不思議そうに首を捻って)……？」

○新築アパート・前(日替わり)

真新しい綺麗な外観。

眩しそうに見上げている義生。

○同・義生家

引越したて、がらんとした部屋。

室内、荷物は段ボール箱が二つだけ。

シンクを拭き掃除している義生。

夢乃、クマのぬいぐるみを振り回しな

がらぐるぐると走り回っていて。

夢乃「パパ、意外とお金あんじゃーん」

義生「貯金切り崩したんだよ。クマも、家も」

走る夢乃を見守っている薫。

薫「荷物これだけ？」

義生「うん、これだけ。美紅の部屋から持っ

てきたのだけだしね」

薫「そっか」

義生「薫のところに置いてるのは全部処分して

いいよ」

薫「ふーん。寂しくないんだ」

義生「僕はもう寂しい人じゃないから」

薫「ホントに捨てるよ？」

義生「いいよ。（意味深にニヤけて）まあまた必要になったら、ほら、あれするから、買うから」

薫「（夢乃に）うざいねえ、パパ」

夢乃「パパうざーい」

義生「（微笑んで見ていて）」

○居酒屋・外観（日替わり、夜）

○居酒屋（夜）

カウンター席の石野と義生。

石野「とうとう引っ越したかあ」

義生「はい。心機一転です」

バイトが枝豆を運んできて。

バイト「どうぞー」

義生「どうもー」

石野「しかしなんで離婚したかね」

義生「あ、言ってなかったですっけ」

石野「ん？」

義生「してないんですよ、それが」

石野「は？」

義生「離婚。してないんです」

石野「え？」

義生「いや、もう、しかけなんですけどね。

お互い名前書いてるし。でもまだ役所に持って行ってないんです」

石野「え？　なんで」

義生「それが僕もわかんないんですよねえ」

石野「ん？」

義生「いつでも出せる状態のまま、しばらく別居して、どうなるか。まだわかんないんです、誰にも。期限も決めてません。こういう結婚生活もあるってことです」

石野「ムズムズしないのか、そういうの。森崎くんの性格で」

義生「いやー、しないですね。慣れました、こういうの。ずっと自由な女性と一緒にいたんで（と、微笑む）」

（了）